



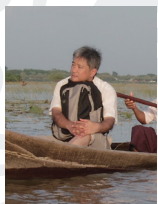
Title	特定非営利活動法人AMDA社会開発機構（AMDA-MINDS）
Author(s)	白幡, 利雄
Citation	目で見るWHO. 2022, 79, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88570
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特定非営利活動法人AMDA社会開発機構 (AMDA-MINDS)



認定NPO法人AMDA社会開発機構
海外事業運営本部長

白幡 利雄

学生時代に手話を学んだ後、国際協力の世界へ。2014年にAMDA-MINDS入職、2020年から現職。早稲田大学大学院修了（教育学修士）。

AMDA-MINDS とは

AMDA 社会開発機構（AMDA-MINDS、アムダマインズ）は、人づくり村づくりを通じ、世界の貧困地域において暮らしの改善に取り組む認定 NPO 法人です。現在、アジア・アフリカ・中南米の 8 か国で、母子保健、保健衛生、生計向上、農業、青少年育成など多岐にわたる活動を、約 100 人のスタッフ（邦人スタッフ 20 人、現地スタッフ 80 人）とともに実施しています。駐在員を派遣しているのはアジアのミャンマー、ネパール、そして中米ホンジュラスの 3 か国。その他、インドネシア、アフリカのシエラレオネ、ニジェール、ザンビア、マダガスカルには職員を一定期間派遣しつつ、現地スタッフやパートナー NGO とともに日々の取り組みを進めています。いまだに世界中で猛威をふるう新型コロナウイルスに対しても、各地で必要とされる支援を提供し続けています。

岡山発の国際協力

私たち AMDA-MINDS の特徴の一つに、本部が岡山という地方都市にあることが挙げられます。日本の多くの NGO が東京などの大都市に活動拠点をもち、ある程度の組織規模をもつ団体の本部が地方におかれていることは、少々珍しいことだといえます。これは 1984 年、岡山で内科の開業医をしていた菅波茂が、アムダを同地で設立したことに端を発しています。そして 2007 年 4 月、中長期の社会開発分野の専門性を高め、活動内容をより充実させることを目的に、特

定非営利活動法人アムダの海外事業本部を別法人化したのが、AMDA-MINDS です。緊急救援・国際連携を専門とするアムダのほか、日本に住む外国人への医療情報サービスを提供している AMDA 国際医療情報センター、世界各地に 32 の支部をもつ AMDA International などによって構成される AMDA グループの一員として、これまでに延べ 12 か国の農村や都市スラムで活動してきました。

大切にしていること

私たちが目指しているのは、「家族の今日の平和な生活が保障され、明日への希望が抱ける社会の実現」です。そのために必要な支援を、各国の状況にあわせて計画し、継続的に実施してきているのですが、一貫して大切にしている姿勢があります。その一つが、地域の人々に「寄り添う」ということです。もともと医師が始めた団体を母体としていることもあり、いまま保健衛生や母子保健の向上を目指す活動は多いのですが、こうした専門性の高い分野の活動であれば、なおさら注意して避けなければならないのが「こうしたらいだろう」という、私たちの側の考えや価値観の押し付けです。国際協力の現場でよく語られることとして、老子の格言である「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」ということがあります。AMDA-MINDS はその後のことまで徹底的に考えるべきだと思っています。それは、単に釣り方を教えるだけでは、釣ろうという意欲のない人はすぐに忘れてしまいますし、逆に知識や技術に長けた人が、そこから得られる

利益を独占してしまうことにつながる可能性もあるからです。

そこで、私たちはまず、解決すべき根本的な問題は何かについて、地域の人々と一緒に時間をかけて探っていくことから始めます。そして住民自身が行動計画をたて、実践と修正を繰り返す中で必要とされる研修の機会を提供するなど、常に寄り添いながら伴走する、そんな姿勢を心掛けているのです。もちろん、各国の行政とも連携し、保健医療施設を建設・修繕したり、医療物資を提供したりといったことにも積極的に取り組んでいます。



写真1：馬に乗って移動する妊婦（ホンジュラス）

ミャンマーでの活動例

コロナ禍に加え、政変による社会情勢の混乱が続くミャンマーですが、私たちは同国内でも開発がもっとも遅れている地域の一つとして知られ、少数民族が多く暮らすシャン州北部のラショー郡で、母子健康改善プロジェクトを 2019 年 2 月から 3 年計画で実施しています。「村人が自ら、母子の健康を守る行動をとれるようになること」を目標とするこの活



写真2：妊婦の疑似体験（ミャンマー）

動の様子を、駐在員のレポートから一部抜粋してご紹介します。

 ここは、シャン族（101 世帯）が暮らすカウンショー村。夕暮れ時、畑仕事を終えた村人が 40 人ほど村長の家に集まりました。今日は AMDA-MINDS が月に 1 度開催する母子保健研修の日。スタッフは、すでに室内の壁に、女性器のしくみや月経の周期などについてのカラフルなポスターを貼って、準備万端です。

「女性の下半身には 3 つの穴があります。それぞれ何のための穴でしょう?」。スタッフが参加者に問いかけます。照れたような笑いが広がる中、「おしっこ、ウンチと、赤ちゃんの穴!」と元気な中年女性が答えます。

「正解! 赤ちゃんの穴からは、10 歳くらいになると時々血が出るようになります。実はこれ、大人になったときに赤ちゃんを生むための準備なのです」。男性は「そうだったのか」と驚いた表情。こうして月経や妊娠についての研修が始

まります。

2 時間の研修では、男性に妊婦の疑似体験をしてもらうコーナーも設けました。妊婦のお腹の重さは臨月には 7kg になりますが、村の女性たちは、時には上の子を背負いながら、出産直前まで畑仕事をします。研修ではその大変さを男性にも実感してもらおうと、7 リットルの水を入れた袋を、男性のお腹と背中に 1 つずつ装着して、実際に動いてもらいました。

男性が立ち上がろうとしてよけると「ホラホラ、赤ちゃんが危ないよ」など声が飛び、会場は笑いに包まれます。

 このように、研修には女性だけでなく男性にも参加してもらうこと、ミャンマー語を十分に理解できない住民のためにシャン語を用いること、みんなが楽しく学べるようにすることなど、さまざまな工夫をこらして日々の活動を進めています。

明日への希望に向けて。



写真3：広報アニメ第1弾「愛LOVEマインズ」



写真4：広報アニメ第2弾「すずめ!! マインズジャー」

ウェブサイトをご覧ください

活動の詳細はもちろん、駐在員が各国からお届けする「活動レポート」、個人の思いを伝える「スタッフブログ」など、情報満載のウェブサイトを、ぜひご覧ください。4 分程度で見られる広報アニメもありますよ!

<https://www.amda-minds.org/>

